

ことばだより

Vol.5

2022（令和4）年1月

連載

ことばと心を育てる
ICT活用に群馬大学 准教授
かわうちあきひろ
河内昭浩

1. 「使ってみる」から始めてそのあとは

「国語の授業でPC（タブレット）をどう使えばよいのか」というお声をたくさんいただきます。そんな時は、「まずは使ってみましょう」とお答えします。正確には、「まずは『学習の見通しをもたせ、興味・関心を高める場面』で使ってみましょう」です。教材に関すること、作者に関すること、なんでも気になることを子どもと一緒に調べてみるとよいでしょう。例えば、『ウミガメの命をつなぐ』（四下）の導入場面。今までは、一枚のウミガメの写真を黒板に掲示していた場面で、一緒に「ウミガメ」についてインターネットで調べてみたらどうでしょう。数多くの映像や写真が、教材文の内容への興味・関心を高めてくれることでしょう。また、「デジタル教科書」にも多くの情報が格納されています。あまり難しく考えず、できることから始める。そんな心持ちがまずは大切です。

使い慣れてきたら、さまざまな場面でPC（タブレット）をはじめとしたICT（情報通信技術）を活用してみましょう。国語科におけるICT活用場面として、次の五つの場面が想定されています。

- ①学習の見通しをもたせ、興味・関心を高める場面
- ②情報を収集・整理し、集めた情報を活用して自分の考えを形成する場面
- ③考えたことを表現する場面
- ④学びを共有する場面
- ⑤学習の内容を蓄積したり振り返ったりする場面
文部科学省『教育の情報化に関する手引き』（追補版）

例えば、『リーフレットで知らせよう』（四上）では、伝えたいことを決める・組み立てるために、

「見学メモ」や「調べたことメモ」を作成します。この「メモ」の作成に便利なアプリがあります。また、自分のメモを友達と見比べたり、感想を伝え合ったりするのに便利なアプリもあります。

「使ってみる」から始めて、少しずつさまざまな教材・場面でICT活用に取り組んでください。もちろん、全ての場面にICTが「便利」なわけではありません。『「便利」ということ』（四下）の末尾の一文にあるとおりです。「どのようなときに便利で、どのようなときにそうではないのかを、よく考えていくことが大事なのです」。

2. これからのICT活用において大切なこと

ICTは、「道具」です。ではなんのための道具か。いうまでもなく、「資質・能力」を育成するための道具です。これからの国語科におけるICT活用においては、ICTが、どの「資質・能力」の向上につながるのかを、点検・評価し、更に授業を改善していくことが大切です。単元計画、年間計画の中に、「確かな資質・能力の向上につながるICTの活用」を位置づけていきましょう。

もう一つ、これからのICT活用において大切なことは、「全ての子ども、全ての先生にとって意義のある活用」にすることです。冒頭の、「まずは使ってみましょう」という私の言葉に、「なんだそれくらい」と思った先生がたも多くいらっしゃることでしょう。そのかたがたが、ICT推進リーダーとして、学校全体、地域全体のICT活用を支えていってほしいと思います。

次号（3月発行予定）に続く。

次号では、より具体的に、どのような指導の際にICTを活用できるのかを紹介予定。

1. 登場人物と読者の関係を考える

『木竜うるし（人形げき）』^{きのしたじゅんじ}（木下順二）は4年生の文学的文章の最終教材として位置づけられた「戯曲」教材です。『ひろがる言葉 小学国語 四下』では「七 場面 のうつり変わり」と、登場人物の気持ちの変化を読もう」という単元に位置づけられていて、その「学習内容」の中心は「登場人物の考え方の違いや、その移り変わりを考えながら読み、気に入った場面を物語のように書きかえる」となっています。

『木竜うるし』は1980年代に小学校国語教科書の教材として使われ始めました。その時期に西郷竹彦^{さいこうたけひこ}は「構造的に認識し表現する力」を育てるうえで『木竜うるし』の教材としての大切さを指摘し、「〈人物と読者の関係〉を「場面ごとにきちんととらえさせ、その関係がどのような効果を果たしているか（どのように面白くしているか）を考えさせたい」「また、せりふとト書きの関係を考えさせることも大事なこと」だと述べています（注1）。

現在の小学校から高等学校で使われている国語教科書教材の中に「戯曲」教材の数は著しく少なく、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』の中にも「戯曲」という語彙自体が見あたりません。それだけに『木竜うるし』は貴重な教材であり、西郷が指摘しているような「〈人物と読者の関係〉」を学習者に意識させるために大きな意味をもちます。西郷のいう「〈人物と読者の関係〉」が物語や小説を読む場合にも重要な視点になるからです。「〈人物と読者の関係〉」を読むための手がかりにすることで、登場人物の言動をよりこまやかに読み取ることができるのです。特に、西郷は「〈人物と読者の関係〉」のうち「人物は知らない、読者は知っている」という仕組みに目を向けることで、『木竜うるし』の権八の独白が「読者に対するさまざまな効果」をもたらすとしています。「人物は知らない、読者は知っている」という仕組みになっているので、読者は二人の言動を立ち聞き・盗み見しながら読み進めることができるのです。

2. 「ト書き」に目を向けて読む

物語教材に「ト書き」はありません。「ト書き」に注目して表現を検討することは戯曲教材学習に特有のことです。

『木竜うるし』の藤六はたとえ偶然見つけた上質の多量な「うるし」であっても、それを発見者だけで独占せずにそれは「村中みんな」「村のもん」で分配するという考え方の持ち主です。ひるがえって権八は、財産はどれだけあっても多すぎることはないという考え方の持ち主のようです。しかし、権八は権力者でも資本家ではなく一介の「きこり」です。むしろ彼の性格ないし一攫千金の「夢」が「うるし」を独り占めする欲を生んだのかもしれない。権八が「うるし」を山分けしようと藤六に言ったあとの二人の会話です。

- 藤六 おら、こんなたくさん、こまるわ。それより、村のもん、連れてこう。
- 権八 ……
- 藤六 おら、ばあ様と二人ぎりだで、今のままのきこりだけでけっこうおまんま食えるだでな。
- 権八 ……
- 藤六 けど、おらどうでもええ。おめえがほしけりゃ、一人で取るさ。なら、おら帰るでよ。
- 権八 （考えていたが）藤六よ。
- 藤六 ん？
- 権八 おめえは気だてのええやつだなあ。
- 藤六 なんでや？
- 権八 （考えて）よし、村のもんを連れてこう。
- 藤六 そうか。よろこぶぞう、みんな。

「ト書き」の部分に注目してみます。「(考えて)」のあとの権八の言葉は、自分を「気だてのええやつ」とする理由を尋ねた藤六の質問には直接向けられず、その少し前の「おら、こんなたくさん、こまるわ。それより、村のもん、連れてこう。」に向けられていると考えられます。おそらくト書きの「(考えていたが)」「(考えて)」の内容はそれに関わっています。私欲に従って「うる

し」を山分けすることまで提案した権八ですが、一方でその頭の中では「村」の仲間への思いを第一にする藤六と自分とを引き比べ、自分の切れない「のこぎり」を心にかけてくれた「気だて」のことを強く思い返したにちがいありません。「村のもん、連れてこう」という藤六の言葉と結びつけて考えながら、自分だけが特別ではなかったことに思い至り、藤六の利他の心をようやく理解することができたのです。

3. 民話との比べ読みを通して

木下順二自身が再話した同名の民話で、この場面は次のようになっています（注2）。なお、民話では藤六が「ごん六」、権八が「そうべえ」となります。

「おめえがほしけりゃ、ひとりでとるさ。なら、おら帰るでよ」

といて、すっと上へ行きかけたからそうべえはびっくりして、

「ま、ま、まってくれ。おらひとりのこされたら、おっかないでよ」

といて、それからだいが考えて、

「うん、よし。なら、村のもんをつれてきて見せてやろう」

といった。

ごん六も大よろこびで、すぐぬまからあがって、さっそく村じゅうのみんなをここへよび集めることにした。

そうべえは「おっかないでよ」と言ってから「だいが考えて」「村のもんをつれてきて見せてやろう」と言っています。しかし、「おめえは気だてのええやつだなあ」というせりふは戯曲にしかありません。そうべえと権八とでは、「考え」る内容がずいぶんちがっているのです。

権八のせりふのほうがその内面の変化を強く表しています。戯曲と民話とを読み比べることで『木竜うるし』の人物像を深く捉えることができそうです。

権八の変化は、木下順二自身の言葉を借りると「発見者である自分自身が根底的に否定されてしまわなければならない」「“発見”の結果が自己否定になる」という経験の結果です（注3）。権八も藤六の言葉をきっかけに、「自己否定」せざるをえなかったがゆえに「発見」し、だからこそ変化したのです。少なくとも民話『木竜

うるし』のそうべえの「変化」にそういうところはありません。恐ろしかったからごん六に従っているだけで、内面において「自己否定」などしてはいません。木下は民話『木竜うるし』を発表したあとに戯曲『木竜うるし』をつくりました。それだけに、戯曲『木竜うるし』には、民話『木竜うるし』からは想像できない登場人物の対話・葛藤が刻まれています。

4. 『木竜うるし（人形げき）』学習の意味

このように、『木竜うるし（人形げき）』の権八の変化を藤六との言葉のやりとりとの関係で捉えることは、登場人物の変化を立ち聞き・盗み見た自分たちの側に生じた変化を意識することにつながります。「劇的」に読む行為を経験することになるのです。

『木竜うるし（人形げき）』の学習でそのような経験をしたあとに、既習の物語教材を再読してみると、それらの物語の登場人物の言動をより切実に感じることができるのではないのでしょうか。既にわかっていると思っていた登場人物たちの別の側面が見えてくるからです。考えた末に「おめえは気だてのええやつだ」と藤六に言うことができた権八のように、です。

既習作品の解釈を修正できるとすれば、紛れもなくそこには自己発見が伴います。自分自身の今まで見えなかった側面を発見できるよう変化した自己を経験することができるからです。それが『木竜うるし（人形げき）』を学年末に読み、考えることの意味なのです。

（注1）西郷竹彦監修、吹田・守口文芸研著『文芸研・教材研究ハンドブック10 木下順二＝木龍うるし』、明治図書、1986年、12-13頁

（注2）木下順二『わらしべ長者－日本の民話二十二編一』岩波世界児童文学集15、岩波書店、1994年、215-216頁

（注3）木下順二『“劇的”とは』、岩波書店、1995年、29頁

「辞書」を活用して語彙力を増やそう

小学国語デジタル教科書には、専用で開発した「辞書」というコンテンツを用意しています。

教科書に掲載している語句を集めているので、授業中や家庭学習など、いつでも気になる語句を調べることができます。

今年4月より発売する『学習者用デジタル教科書+デジタル教材』の辞書では、語句を五十音順に並べています。紙の辞書を引くように、ページをめくって調べることができるので、目的の語句だけでなくさまざまな語句に出会うことができます。



▲学習者用デジタル教科書+デジタル教材

『指導者用デジタル教科書（教材）』では、授業中すぐに語句を提示できるように、脚注欄から表示できるようにしました。黒字は紙の辞書にも掲載してある語句、青字はデジタル教科書で追加したつまずきやすい語句、赤字は語句に対応した写真を表示します。



▲指導者用デジタル教科書（教材）

学習者用の「辞書」の使い方



- ① ツールバーから「辞書」のアイコンを選ぶ。
- ② さくいんから調べたい語句を選ぶ。

授業中にみんなで語句を確認できる『指導者用デジタル教科書（教材）』と、一人一人が自分で調べることができる『学習者用デジタル教科書+デジタル教材』。

いつでもどこでもさまざまな場面で活用できる辞書は、子どもたちの語彙力を増やすだけでなく、自ら学ぶ力を養うことができます。ぜひ、ご活用ください。

本誌のデザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさねの色目」(平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩)をイメージした配色を用いています。今回の号では、四季のかさねの色目の中から「胡桃色」を選びました。『枕草子』にも載っている、胡桃染めにちなんだ色目です。ぜひ次号のデザインもご覧くださいませと幸いです。

※「かさねの色目」の組み合わせには、諸説あります。

小学国語通信 ことばだより Vol.5 2022 (令和4) 年1月発行

教育出版株式会社 編集局 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFT ビル西館

TEL: 03-5579-6278 (代表)